

文化資産のデジタルアーカイブが拓く、新たな創造への道

デジタルアーカイブ

デジタルアーカイブ
推進協議会広報誌
2004 / No. 24
<http://www.jdaa.gr.jp>

春



CONTENTS

地域デジタルアーカイブ全国大会
2003 in HIROSHIMA

デジタルアーカイブ地域普及啓発セミナー
2003 in 北海道

地域デジタルアーカイブ全国大会2003 in HIROSHIMA	2
15年度デジタルアーカイブ普及セミナー(弘前・八戸)	5
デジタルアーカイブ地域普及啓発セミナー2003 in 北海道	6
デジタルアーカイブ研究セミナー2003(仙台)	8
第2回 デジタルアーカイブ講演会(沖縄)	10
沖縄デジタルアーカイブ『Wonder沖縄』Web公開のご案内	12
「日本アーカイブズ学会(仮称)」の発足に向けて	12
事務局だより / メールマガジンのご案内	12

JDAA

2003年10月15日～16日 広島

地域デジタルアーカイブ全国大会2003 in HIROSHIMA

次なるステージ...「デジタルアーカイブによる地域ブランドの構築とビジネス展開へ」

10月15～16日、広島県の宮島町観光会館ホールにて「地域デジタルアーカイブ全国大会2003 in HIROSHIMA」が開催されました。全国各地のデジタルアーカイブ関連団体(右頁参照)を一堂に会した同大会では、地域ブランドの確立に向けた各地の個性的な取り組みが紹介されると同時に、デジタルアーカイブの利活用を通じた地域振興の今後について、さまざまな角度から協議がなされました。

主催 ■ 中四国デジタルアーカイブ推進協議会、デジタルアーカイブ推進協議会(JDAA)

協賛 ■ 中国情報通信懇談会、宮島町、企業環境デザイン研究会

後援 ■ (財)デジタルコンテンツ協会、中国経済産業局、中国総合通信局、中国五県、四国四県ほか31団体



主催者挨拶

金井 宏一郎

中四国デジタルアーカイブ推進協議会会長

開会の挨拶にたった金井宏一郎氏(中四国デジタルアーカイブ推進協議会会長)は、「歴史的な文化遺産に恵まれたこの地で、全国の地域アーカイブ活動の一端に触れられることは望外の喜び」と述べ、本大会を通じた地域間交流の拡大に期待を寄せました。



国の施策紹介より

茅野 民夫

総務省情報通信政策局情報政策課
コンテンツ流通促進室コンテンツ
企画係長



茅野氏は2003年より文化庁と合同で進める《文化遺産オンライン構想》について触れ、「日本のブロードバンド使用料は、いまや世界一の低価格を実現した。もはやインフラ整備の段階は終わり、今後はその利活用に重点をおいた支援策が必要」と強調しました。

総務省では平成18年度の開設を目標に、日本各地の文化遺産をインターネット上で総覧できるポータルサイトの構築を進めていますが、この点について茅野氏は、「有形無形の文化遺産を、一般に対して積極的に公開していくのが目的。そのためにも地域の協力は欠かせない」と述べ、政府としては地域それぞれの活動を踏まえつつ、引き続きデジタルアーカイブの活用を推進していくとの方針を明らかにしました。

松下 香苗

経済産業省商務情報政策局
文化情報関連産業課 課長補佐



デジタルコンテンツ産業の推進施策に関する説明のなかで、松下氏は、「日本はマンガやゲーム、アニメなど、世界的な競争力を持つコンテンツを有する反面、産業全体としてのつながりが悪い」としながら、特に制作事業者については、コンテンツ流通のなかであってどうしても弱い立場にあると指摘しました。

現在、経済産業省では、新たな流通ルートの開拓や人材育成、また制作費支払いに関する法整備など、制作事業者そのものの活性化を図る支援策を進めています。こうした取り組みについて松下氏は、「外貨獲得の意味でも、世界に通用するデジタルコンテンツと、それを担うクリエイターの育成は必須の課題」と述べ、独自性の高いデジタルコンテンツを通じたジャパンプランド確立を目指したいと語りました。

●参加団体一覧



手法さまざま全国デジタルアーカイブ事例発表

ここ数年、世界的に関心の高まりつつある地域デジタルアーカイブについて**武邑光裕氏**(東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授)は、「いわゆる文化経済の軸となっているのは観光産業。たとえば日本を訪れる外国人観光客の数(年間)は、パリの17分の1でしかない。今後日本は、魅力ある国づくりについて真剣に考えていく必要がある」と述べ、その方法論のひとつとして地域ブランディングの重要性を訴えました。

国内では現在、地域毎にさまざまなアーカイブの利活用が進められていますが、その先進的な事例として、京都および沖縄における取り組みが紹介されました。

早期からデジタルアーカイブのビジネス化に取り組んできた京都では、平成15年度の新規事業として「市民文化のデジタルアーカイブ」を進めています。この点について**宮原尚江氏**(京都デジタルアーカイブ研究センターアシスタントマネージャー)は、「京都市民所蔵の古写真データベースをはじめ動画や音声のアーカイブなど、あらゆるメディアを通じた地域文化の保存を主眼としたもの」と説明したうえで、「従来の『儲ける』という視点から一歩引いて、今後は市民の協力のもと、地域の暮らしに根ざしたデータベースを構築していきたい」と抱負を述べました。

また沖縄からの参加となった**久場長武氏**(沖縄県商工労働部情報産業振興課長)は、平成14年度デジタルアーカイブ整備事業の一環として進められたプロジェクト《Wonder沖縄》について、そのコンセプトや制作体制、プロセスなどを成果集のDVDを用いて説明しました。

同プロジェクトのコンテンツ制作は、公募により採択された県内企業32社からなるコンソーシアムが担当しましたが、その背景として久場氏は、「技術の蓄積や人材育成など制作過程を通じて得られるメリットは大きい。そうしたことが、ひいては沖縄の情報通信産業の振興につながる」と述べました。

従来資料保存の観点から一歩抜け出した感のある今回の取り組みは、一方で県内コンソーシアムによる制作の完結を目指した試みでもあったようです。

歴史・自然・芸能など、沖縄の風土文化を網羅するかたちで構成されたデジタルアーカイブ「Wonder 沖縄」。Webサイト内の情報量は、ページ換算で約1万ページ、動画は10時間以上に及ぶ。

● <http://www.wonder-okinawa.jp>



中四国関係企業の事例発表

広島

ブロードバンド時代のハイビジョン制作

丸川 眞佳

株式会社アートテレビ 代表取締役



(株)アートテレビは、平成9年に広島県の原爆ドームをハイビジョンCG映像で再現したことで知られていますが、近年は絵画などの文化財と、その修復過程(非破壊検査など)を映像化するなど、映像メディアによるデジタルアーカイブにも積極的に取り組んでいます。またそれら成果は、今後教材などへの流用も検討されているそうです。

丸川氏は、今後の映像アーカイブの展望として「これまでのように高精細だから、綺麗だからといった理由だけでは機能しない」としたうえで、いかに一般市民のために役立てることができるかという視点が大切だと語りました。

島根

神楽の記録

安達 嘉信

株式会社武蔵野オフィス 代表取締役



いまでもこそ鑑賞の対象として位置づけられている神楽ですが、古代の人々にとってそれは、あくまでも神聖で神がかり的な儀式でした。

島根県内に受け継がれる代表的な3種の神楽(出雲、石見、隠岐)のデジタル保存を進める安達氏は、今後の課題について「現存する映像は、神事の記録というよりはむしろ鑑賞用としての意味合いが強い」としたうえで、神楽の精神性や演者の内面性など、映像表現では捉えにくい部分の記録についてその重要性を訴えました。神楽の本質的な意味や動作を正確に伝える意味でも、今後は3方向から多面的な撮影など、最新技術を駆使した映像のアーカイブを検討しているそうです。

鳥取県の生態アーカイブと コンテンツ流通ビジネス

高橋 孝之

株式会社山陰ビデオシステム 代表取締役



(株)山陰ビデオシステムでは、コハクチョウをはじめ鳥取の生態系(自然)をモチーフにした映像アーカイブを続けてきました。地域の資産を活かしたビジネス展開について高橋氏は、「映像は一般に『素材』と『パッケージ』に大別されるが、今後は地域ならではの価値ある『素材』をいかに流通させていくかが鍵になる」と語り、映像アーカイブビジネスにおけるワンソース・マルチユースの可能性を示唆しました。

また同社では、ケーブルテレビ上の自主制作チャンネルに地元住民を出演させるなど、映像メディアを通じた地域文化アーカイブにも積極的に取り組んでいます。

デジタルアーカイブにおける 高度な画質と色彩伝達

小山 征二

株式会社プロテック 専務取締役



デジタルカメラ全盛の昨今とはいえ色彩伝達や情報伝達などの面ではまだまだという認識があるなか、(株)プロテックでは「CMS」と呼ばれる独自のカラーマネジメントシステムの開発を通じて、デバイスの特性に応じた色彩の再現を可能にしています。

小山氏は、従来フィルムが持つ色彩のデータを物理的にそのまま取り込むことのできるスキャナーは存在しないと前置きしたうえで、「デジタル化のステップが増えれば増えるほど、最終的にはそれを補完する職人技が必要だった。しかしCMSを用いれば、少なくとも及第点レベルの色彩はしくみで再現することができる」と述べ、デジタルアーカイブ技術の高度化と効率化のための一手法として、その可能性を訴えました。

XML形式デジタルアーカイブ& 高速データベース

坂井 均也

CAIシステム株式会社 専務取締役



山口県の文化財デジタルアーカイブの運用にあたりCAIシステム(株)では、膨大なデジタル資料の整理と階層化に適したXML形式のデータベース構築を進めてきました。データとシステムの分離、あるいは時代変化への対応性などの面で優れたこの形式は、現在、病院の電子カルテづくりなどにも流用されています。

また同社では科学技術文書のデジタル化をはじめ、ナノテク分野におけるe-ラーニングシステムの構築など、九州大や大阪大などとの産学連携も積極的に進めています。こうした取り組みについて坂井氏は、「デジタルアーカイブとは、なにも文化財の保存だけとは限らない」と述べ、高速データベースを用いたデジタルアーカイブの横軸への展開可能性を示唆しました。

イサムノグチの世界と 讃岐の漆

二ノ宮 博之

アイニチ株式会社 代表取締役



香川県は、かつて近代彫刻の巨匠・イサムノグチが長く居住し制作を続けていた場所でもあり、また漆工芸の盛んな地域でもあります。こうした貴重な地域資産を活かすべく同県では「アートツーリズム」と称したさまざまなPR活動をはじめとしています。

2000年に開館した「イサムノグチ庭園美術館」には、国内はもとより海外からの来館者も多く、今では国際的に認知度の高い美術館となりました。漆芸についても県内に2人いるという人間国宝作家を通じて、蒔絵(きんま)をはじめとする伝統的な技法が、若い人たちに継承されているそうです。

二ノ宮氏はこうした資産のデジタル化を通じながら、「今後より一層、香川＝芸術の街というイメージを浸透させていきたい」と抱負を述べました。

プログラム

第1部 平成15年10月15日(水)

- 開 会
- 主催者挨拶
金井宏一郎 中四国デジタルアーカイブ推進協議会 会長
- 国の施策の紹介
「文化遺産オンライン構想について」
茅野 民夫
総務省情報通信政策局情報政策課 コンテンツ流通促進室
コンテンツ企画 係長
- 「デジタルコンテンツ産業の推進」
松下 香苗
経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課 課長補佐
- 基調講演
「デジタルアーカイブのライセンスビジネス及び商品化ビジネス」
手嶋 毅 株式会社DNPアーカイブコム 常務取締役
- 手法さまざま全国デジタルアーカイブ事例発表
コーディネータ 武邑 光裕
東京大学大学院新領域創成科学研究科 助教授
- 「デジタルアーカイブと地域ブランディング」
パネリスト 武邑 光裕
東京大学大学院新領域創成科学研究科 助教授
- 「市民文化とデジタルアーカイブ」
パネリスト 宮原 尚江
京都デジタルアーカイブ研究センター アシスタントマネージャー

「沖縄における地域振興とデジタルアーカイブ」

パネリスト 久場 長武 沖縄県商工労働部情報産業振興 課長

- 中四国関係企業の事例発表
【広島県】...「ブロードバンド時代のハイビジョン制作」
丸川 眞佳 株式会社アートテレビ 代表取締役
- 【島根県】...「神楽の記録」
安達 嘉信 株式会社武蔵野オフィス 代表取締役
- 【鳥取県】...「鳥取県の生態系アーカイブとコンテンツ流通ビジネス」
高橋 孝之 株式会社山陰ビデオシステム 代表取締役
- 【山口県】...「XML形式デジタルアーカイブ&高速データベース」
坂井 均也 CAIシステム株式会社 専務取締役
- 【岡山県】...「デジタルアーカイブにおける高度な画質と色彩伝達」
小山 征二 株式会社プロテック 専務取締役
- 【香川県】...「イサムノグチの世界と讃岐の漆」
二ノ宮博之 アイニチ株式会社 代表取締役
- 「地域デジタルアーカイブ宮島宣言」発表
- 地域交流会
- イベント＜菊花祭の夕べ＞

第2部 平成15年10月16日(木)

- 全国デジタルアーカイブ推進団体事務局会議

地域デジタルアーカイブ 全国推進団体事務局会議

翌16日には、全国各地の推進団体を一堂に会した事務局会議が開催されました。会場では地域それぞれの活動はもとより、技術面や資金面などアーカイブの実施運用に関するより詳細な情報が示されると同時に、地域間の交流・連携を通じたデジタルアーカイブの新たな方向性について、活発な議論が交わされました。



弘前・八戸

青森デジタルアーカイブ推進協議会 主催

15年度デジタルアーカイブ 普及セミナー

市町村合併をひかえ、地域資産の デジタルアーカイブに高い関心

8月26日は弘前商工会議所、また9月9日には八戸ユートリーにて、青森デジタルアーカイブ推進協議会主催の「15年度デジタルアーカイブ普及セミナー」が開催されました。今年度は、国のe-japan戦略IIと電子自治体推進指針を踏まえ、セミナー対象を市町村情報化担当者にまで拡大しての開催となりました。

プログラムでは、地域文化デジタル化事業とコンテンツ産業政策を中心テーマとした講演がなされましたが、折りしも市町村合併などをひかえて、デジタル映像による文化・歴史資産の記録・保存に対する各地域の機運が高まっていることもあってか、両会場とも行政・教育関係の方々を中心に多数が参加、地域デジタルアーカイブに対する関心の高さがうかがわれました。

弘前セミナーの様
(120名参加)



八戸セミナーの様
(70名参加)

プログラム

第1部	「地域文化デジタル化事業の現状と課題(弘前).....	梶 護	総務省自治行政局
	「コンテンツ産業政策の現状と課題(八戸).....	片岡宏一郎	経済産業省商務情報政策局
第2部	「デジタルアーカイブと地域振興」.....	笠羽 晴夫	デジタルアーカイブ推進協議会
第3部	「デジタル時代の情報セキュリティの現状と対策」.....	深津 貞雄	デット ノルスケ ベリタス

デジタルアーカイブ地域普及

～ デジタルコンテンツが可

基調講演



「我が国コンテンツ産業の現状と課題 ～コンテンツ産業は日本の リーディング・インダストリーになれるか～」

片岡 宏一郎 (経済産業省文化情報関連産業課 課長補佐)

日本のリーディング・インダストリーとして期待の高まるコンテンツ産業について、片岡氏は、「リーディング・インダストリーとは雇用を支える成長力や競争力はもちろん、日本人が誇りを持つことのできる産業なのではないか」と語り、伝統文化に限らずポップカルチャーなどの新しい流れが生み出すジャパnbrandと、それがもたらす経済的な波及効果に期待を寄せました。

現在、経済産業省では、コンテンツ産業への支援策として「市場の拡大」「人材育成」という二つの柱を掲げています。市場拡大の具体策としては、国際的なコンテンツマーケットの創設をはじめ、地域の公民館などを利用した映像流通ルートの立ち上げなどが進められています。また人材育成についても、プロデューサー育成やコンテンツクリエイターのスキルアップを目的としたスキームが策定され、実施に当たっています。

国内コンテンツの強化を目的とするさまざまな支援策が講じられるなか、一方で片岡氏は、「コンテンツ産業の実態として、制作部門は流通の『下請け』となるケースが多い」と指摘すると同時に、「今後は制作事業者自らがリスクを負って独自に資金調達していくことも必要」と述べ、政府としても知的財産を用いた資金調達手段の多様化を推進していくとの方針を明らかにしました。



11月25日、札幌全日空ホテルの24階・白楊の間に
て「デジタルアーカイブ地域普及啓発セミナー2003
in 北海道」が開催されました。今年で4回目を迎える
同セミナーでは、コンテンツ産業をめぐる最新の国の
施策が紹介されると同時に、地域情報発信の新しい

地域企業におけるデジタルコンテンツの活用事例



地域活性化と『ちずの街・あさひかわ』 ～デジタルコンテンツを活用した地域情報発信システム～

朝日 守 (北海道地図株式会社 代表取締役副社長)

北海道の旭川では、民官の技術を融合した新たな取り組みとして、電子地図を用いたポータルサイト「ちずの街」を展開しています。同サイトのGIS(地理情報システム)構築に携わった北海道地図(株)の朝日氏は、「電子地図とGIS、Webを融合したこの取り組みが、街おこしの一助となればうれしい」と語りました。

ポータルサイト「ちずの街」に使用されているGISは、旭川市役所の都市計画データベースをはじめ、国土院作成の地図をもとにした北海道地図(株)の数値データなど、さまざまな団体の保有する地図情報のうえに成り立っています。

民官の枠にとらわれないこうした取り組みについて朝日氏は、「『ちずの街』が目指しているのは、共有空間データの実現。地図という共通のフレームに、民官がそれぞれの情報を書き込んでいけたらいい」と語り、そうしたことが安価な情報提供にもつながるはずと述べました。

次いで(株)ネクストウェブの沓澤氏より、ポータルサイト「ちずの街」のシステム説明がなされました。同サイトの特長としては、「しらべる」という検索機能のほか、誰もが自由に情報を書き込むことのできる「とうろく」機能の併設が挙げられます。

検索機能については、「くらしの街」「井戸端広場」など平易な表現によるカテゴリー分けが設定されていますが、この点について沓澤



(株式会社ネクストウェブ 代表取締役)沓澤 克佳

氏は、「通常のポータルサイトのように住所や名前による検索機能が先に立つと、利用者は決まったところにしかいかない。地域ポータルとしては利用者にぜひ『寄り道』してほしい」と語り、サイト利用を通じた地域とのふれあいに期待を示しました。

このほか同サイトには、観光客向けの「バス路線検索」や、地元ゆかりの作家を題材とした文学GISなど、単なる地図や行政情報に留まらないコンテンツが設けられています。

今後の展望として沓澤氏は、「『ちずの街』そのものは、コンテンツではなくシステム。SOHOや民間企業、自治体などあらゆる方面と連携を持ちながら、地域産業として拡大を図りたい」と述べると同時に、他地域との連携についても示唆しました。



ポータルサイト「ちずの街」。検索時の情報過多という問題を防ぐため、同サイトでは、利用者の設定した地図の範囲内にある情報のみが表示される。

● <http://www.c-machi.net/html/index.asp>

25日 札幌

啓発セミナー2003 in 北海道

能にする地域情報発信 ~



いかたちとして、地図を用いた2つの取り組みが発表されました。

主 催 ■ 社団法人北海道IT推進協会、デジタルアーカイブ推進協議会
後 援 ■ 北海道経済産業局、財団法人北海道地域総合振興機構



■ 主催者挨拶

笠羽 晴夫 (デジタルアーカイブ推進協議会 事務局長)

■ 基調講演

「我が国コンテンツ産業の現状と課題
~ コンテンツ産業は日本のリーディング・

インダストリーになれるか ~」

講師 片岡宏一郎

(経済産業省文化情報関連産業課 課長補佐)

■ 地域企業におけるデジタルコンテンツの活用事例

「地域活性化と『ちずの街・あさひかわ』

~ デジタルコンテンツを活用した地域情報発信システム ~」

講師 朝日 守

(北海道地図株式会社 代表取締役副社長)

講師 沓澤克佳

(株式会社ネクストウェブ 代表取締役)

■ 地域におけるデジタルアーカイブの取り組み

「地域情報デザイン実践としてのデジタルアーカイブ
~ スローな街・函館の再発見、再活性化へ向けて ~」

講師 渡辺保史

(函館マルチメディア推進協議会幹事
デジタルアーカイブ部会部会長)

地域におけるデジタルアーカイブの取り組み



地域情報デザイン実践としてのデジタルアーカイブ
~ スローな街・函館の再発見、再活性化へ向けて ~

渡辺 保史

(函館マルチメディア推進協議会幹事 デジタルアーカイブ部会部会長)

渡辺氏は、情報デザインの視点や地域発見型のワークショップなどを通じて、函館の持つ潜在的な魅力を引き出そうというNPO活動を続けています。

その試みのひとつとして進められているのが、観光マップでもガイドマップでもない、函館の新しい地図「ハコダテ・スローマップ」です。

その特長として渡辺氏は、「情報は『スローライフ』『歴史と文化』『自然と親しむ』といった視点に基づいてマッピングされており、その意味では地域のデジタルアーカイブとも密接に関係している。また地図上に記されたピクトグラム(視覚言語)は世界共通の規格。かたちさえ認識できれば、誰でも地域の様子をイメージすることができる」と説明し、地域理解のための新しいインターフェイスとしてその活用を促しました。

「ハコダテ・スローマップ」は、すでにその試作版が函館市内の観光案内所やカフェなどで無料配布されているほか、Web公開もされています。また、こうした活動の一環として渡辺氏は、函館市内において「デジタルアーカイブをみんなでつくる」というワークショップを開催するなど、市民参加による地域コミュニティの育成支援にも努めています。

「函館の街をみんなで歩きながら、気づいたものをデジカメでどんどん撮影していく。そうして集まったデータをコラージュのようにつなげていくと、意外なリンクが見えてくる」

渡辺氏は、こうした試みが人々の地域に対する理解を奥深いものにしてくれると語ります。

「地図そのものよりも、そのプロセスにおけるコミュニケーションや新たな発見が大事。これはデジタルアーカイブにしても同じで、蓄積されたものが地域になにをもたらし、またそこから、いかに新たな価値を創造できるかが大切ではないでしょうか」



印刷版
「ハコダテ・スローマップ 試作版」



Web版「ハコダテ・スローマップ」は、フラッシュを用いたズーム機能のほか、指定したポイントに関する簡単な説明がつく。

● <http://www.slowmap.org/map/>

2003年10月31日 仙台

デジタルアーカイブ研究セミナー2003

デジタルアーカイブをどう活かす

これからのミュージアム情報発信



10月31日、仙台サンプラザのクリスタルルームにて、「デジタルアーカイブ研究セミナー2003」が開催されました。

第一部の事例発表では美術館と出版社の連携事業をはじめ、DVDメディアによる現代美術アーカイブの試み、そしてミュージアムITの世界動向が紹介されました。また二部のフォーラムでは第一部の事例発表者をゲストに招き、権利問題からビジネス展開、次世代インターフェイスにいたるまで、ミュージアムを取り巻く最新の動向と今後の課題が示されました。

主 催 ■ 東北デジタルアーカイブ研究会(東北インテリジェント・コスモス構想推進協議会 / 東北マルチメディア・アプリケーション技術開発推進協議会(TMA))
日本ミュージアム・マネージメント学会(JMMA)東北支部
アート・ドキュメンテーション研究会(JADS)

共 催 ■ 東北インテリジェント・コスモス構想推進宮城県委員会
ミューズボリス共創機構設立準備会
デジタルアーカイブ推進協議会

事例発表より デジタルアーカイブから美術書出版へ —— 美術館と連携したカタログ制作の新方向



藤元 由記子
淡交社美術企画部
編集長



河崎 晃一
芦屋市立美術館
学芸課長

パブリッシングのノウハウを、美術館に

芦屋市立美術館と淡交社(出版社)は、戦前日本における新興写真運動の中心的役割を果たした写真家・中山岩太(1895-1948)の作品集制作を通じて、業種の垣根を超えた先進的なコラボレーションを続けてきました。

1995年の阪神大震災後、中山岩太のアトリエの調査と遺品保護活動にあたった芦屋市立美術館は、約6,000点におよぶ写真資料を救出しました。その後、全作品を寄託された同館は、(中山岩太の)ご家族や有志の協力を得ながら膨大な資料の整理を続けてきましたが、2002年淡交社との出会いから、デジタルアーカイブのプロジェクトとして「中山岩太作品集」の制作に乗り出しました。

当時の経緯について淡交社の藤元氏は、「我々出版社の持つアートパブリッシングのノウハウと、印刷現場における最新のデジタルテクノロジーを融合させることで、このところ元気のない美術館の力になれることはないか。そう考えていたときに耳に入ってきたのが中山岩太の話だった」と語りました。

作家のオリジナリティという壁

プロジェクトは「中山岩太の会」からの資金援助をはじめ、美術館、出版社、そして早期からデジタルアーカイブの可能性に着目していた印刷会社(日本写真印刷株式会社)の協力もとで動きはじめました。しかし資料の編集作業が進むにつれ、アートドキュメンテーションに関するさまざまな課題が持ち上がってきたと藤元氏はいいます。

「アーカイブはコレクションとイコールではないということ。一連の作品をアーカイブしていくには、分類や評価といった視点が必要になってくるし、そうした作業が、モノとしてのコレクションからアーカイブ成立への第一歩となるのではないのでしょうか」

写真作品のアーカイブを中山岩太のような物故作家で考えた場合、作品のオリジナリティをどこに設定するかといった問題があります。この点について藤元氏は、「作家自身がプリントしたいいわゆるヴィンテージプリントは劣化している場合がほとんど。では、新たにネガから起こしたモダンプリントは果たしてオリジナルといえるのか。作業はオリジナル作品の基準をどこに置くかという課題に幾度となく突き当たった」と語りました。

このほかにもトリミングや画像サイズ、制作年やタイトル、またカラー・グレースケールの扱いなど、アーカイブ構築のための作業は山積していましたが、芦屋市立美術館の協力を仰ぎつつ関連資料の調査を続け、課題を1つひとつクリアしていったそうです。

デジタル時代の美的センス

こうしたプロセスを経て、2002年の暮れには全700点の作品撮影が実施されました。撮影は、作品1点につき70から100MBのデータ

サイズを基準に、4,000万画素という当時最高のスペックを持つシステムを組んで行われたそうです。

その後プロジェクトは出版に向けた製版段階へと進み、色彩の階調や再現力におけるデジタルとポジの比較が再三にわたって行われたそうです。当日会場においても、藤田嗣治をモデルにした2種類(デジタル/ポジ)の印刷サンプルが回覧され、デジタル写真の高いクオリティが示されました。

デジタル技術の進歩により、昨今では従来4×5や8×10フィルムの精度に比してなんら遜色のないデジタル撮影が可能になりましたが、一方で藤元氏は出版物におけるデジタル描写の位置づけについて、「本というのは、やはり見栄えなり世界観が大切。その意味では必ずしも技術ありきではない」と強調したうえで、「データ量が最大限に増大すればするほど、そこにプリンティングディレクターの美的センスや表現力が問われてくる。デジタル技術を活かすには、出版する側がいままで以上に確固たる姿勢を持たなければならない」と述べました。

デジタルアーカイブとフィールドワーク

2003年4月に淡交社より出版された作品集《中山岩太 Modern Photography》は、美術館が地元の作家を掘り起こし大冊にまとめ上げたものとして、新聞をはじめマスコミ各社に数多く取り上げられました。

芦屋市立美術館の河崎氏は、今後の地方美術館の役割として次のように述べています。

「当然のことですが、素材がないとデジタルアーカイブはできない。私たち地域の美術館は歴史や文化といった資料の1つひとつを積み重ねながら、それを塊として地域に還元していかなくてはならない。私たちは国立でも県立でもない市立美術館ですが、そういう小さなところだからこそその役割というもの、やはりあると思います」

また河崎氏は、作品集出版に向けた資料整理の経験から、地域の歴史を扱う責任の大きさを改めて痛感したといいます。

「(震災という)大きな事態が起きてはじめて気づいたのですが、自分たちのエリアを歴史的に見たとき、どこに行けばなにがあるという理解がまだまだ足りなかった。もう少し調べておけば、もっと多くのものを救い出せたんじゃないかと。ほんの20秒で膨大なものが失われましたから、その意味では、アーカイブと同時にもっとフィールドワークが必要だと実感しています」

デジタル撮影による作品集《中山岩太 Modern Photography》。日本モダニズムを先取りした代表作から初公開の資料まで、全700点が収録されている。

企画：中山岩太の会
監修：芦屋市立美術館
発行：淡交社
仕様：AB版 / 総320頁
価格：本体10,000円＋税



フォーラムより 「デジタルアーカイブをどう活かす ～これからのミュージアム情報発信～」



フォーラムの様。左から司会の新田氏、次いでゲストの藤元氏、河崎氏、濱崎氏、大野氏。

ミュージアムにおいて、従来ゆるやかに管理されてきた感のある権利関係の問題は、デジタル化とともに新たな局面を迎えつつあります。

川崎市市民ミュージアムでは、現代美術作家の作品を中心にその販売促進を目的としたデジタル化を積極的に進めています。同ミュージアム主任学芸員の濱崎氏は、「現代美術作品については海外のビ

エンナーレなどの例にならい、あくまでも作品のプロモーションを前提とした個別の契約を、作家毎に交わしている。ただネット上での掲載については複製利用に関する警告を明記するに留まっているのが現状」と述べ、技術的あるいは法的な規制の必要性を訴えました。

ネット上における作品データの散逸という問題に対して、大野氏(インターネットミュージアム事務局ディレクター)は、「米国の9.11テロ事件以降、インターネットアーカイブの有用性は世界的に認識されつつあると思う。そうした意味ではネット上のリプロデュースすべてを否定することはできない」と述べ、権利問題とあわせて国内におけるパブリックドメイン(公共の情報財)整備の重要性を示唆しました。

また会場の美術館関係者からは、「複製そのものよりも、それが作品イメージとかけ離れたところで独り歩きしてしまうのが怖い」との意見も示され、データ管理はむしろ作品のイメージ管理に関する美術館の責任が改めて示されました。

プ・ロ・グ・ラ・ム

開 会 (3)世界のミュージアムIT最前線——

【あいさつ】兼松 重任(JMMA東北支部長)

I:事例発表会 「ミュージアム&ウェブ国際会議2003」から

(1)デジタルアーカイブから美術書出版へ——
美術館と連携したカタログ制作の新方向

河崎 晃一(芦屋市立美術館学芸課長)

藤元由記子(淡交社美術企画部編集長)

(2)「デジタル図録」の未来——ミュージアム資産を
生かす多目的コンテンツ・プロダクション

濱崎 好治(川崎市市民ミュージアム主任学芸員)

II:フォーラム(質疑応答・一般参加者とのディスカッション).....

「デジタルアーカイブをどう活かす
～これからのミュージアム情報発信～」

【司 会】新田 秀樹(宮城教育大学助教授)

【ゲスト】河崎 晃一、藤元由記子、
濱崎 好治、大野振二郎

開 会
交 流 会





2003年11月5日 沖縄

第2回 デジタルアーカイブ講演会



11月5日、那覇市内のおきでん那覇ビル・ふれあいホールにて、「第2回 デジタルアーカイブ講演会」が開催されました。

こここのところ沖縄では、同地域の文化を網羅するかたちで構成されたデジタルアーカイブ「Wonder 沖縄」のWeb公開はじめ、今回のイベントと同時期(10/31～11/7)に那覇市内で開催された「山形国際ドキュメンタリー映画祭2003 in OKINAWA《琉球電影烈伝》」など、地域の資産を見直す動きが活発化しています。

講演会では、沖縄を描いた映像作品を題材にその歴史的背景や位置づけなど、地域と映像の関わりをめぐり議論が掘り下げられました。

主 催 ■ 沖縄デジタルアーカイブ推進協議会 (ODAA)
協 賛 ■ デジタルアーカイブ推進協議会 (JDAA)

玉城 健

沖縄デジタルアーカイブ推進協議会 代表幹事



開会の挨拶として玉城氏は、「ここ沖縄には亜熱帯特有の自然や中国、東南アジアに強く影響を受けた独自の文化がある。こうした資産を次世代に継承していくことが私たちの使命」と語り、その一手段として引き続きデジタルアーカイブを推進していくと語りました。

加えて氏は、ちょうど同時期に開催されていた「山形国際ドキュメンタリー映画祭2003 in OKINAWA《琉球電影烈伝》」についても言及し、「ドキュメンタリー映像はまさしくアーカイブそのものであり、そこには戦前戦後を通じたありのままの沖縄が記録されている。今後もこうしたイベントを通じて、県内コンテンツ産業を刺激していきたい」と抱負を述べました。

【講演】

「日本映画における『沖縄』の表象」



アーロン・ジェロー

イェール大学研究員 / 映画研究家

ここ十数年来、日本国内(本土)で製作された映画には、頻繁に沖縄が登場します。ジェロー氏は、そこに描かれる沖縄の姿に、ある共通点を感じてきました。

「ひと言でいうと本土の映画は、沖縄に対しなぜか同情的視点に立ったものが多い」

こうした疑問から本土製作映画の研究を続けてきたジェロー氏は、「エキゾチック、またはパラダイスといったキーワードのもと、沖縄はいつも本土との差異を強調されてきた。そしてそれは、沖縄ではなくむしろ本土の人たちが望んできた差異でもある」と指摘し

ました。

ジェロー氏はその背景のひとつとして「ツーリズム」、いわゆる観光産業の存在を挙げています。

「そもそも人はなぜ観光に行くのでしょうか？ おそらく日常生活で失ったなにかを、自分自身を取り戻しにいくのでしょうか。ですから観光地としての沖縄には、人本来の暮らしや本当の自然がなくてはならない。古き良き日本を旅先に求めるツーリズム——代表的なのが、1970年代の『ディスカバー・ジャパン』という広告キャンペーンです」

忘れかけていたものを見つける、あるいは失いかけていたアイデンティティを取り戻す。こうした文脈は、(沖縄を描いた)映画のなかにも数多く見受けられるとジェロー氏はいいます。その一例として会場では、映画『釣りバカ日誌 11』(本木克秀 / 1999) の一場面

が上映され、ツーリズムの思想のなかで語られる(ユートピアとしての)沖縄の位置づけが解説されました。

またジェロー氏は、沖縄県の(架空の)島を舞台に独立国家の建設を描いた映画『さよならニッポン』(堤幸彦 / 1995) の紹介を通じて、次のような見解を示しました。

「ストーリーのなかで描かれる本土 = 悪、沖縄 = 善といった構図は、観る者に沖縄への感情移入、また沖縄との同一化をもたらす。ただそれが、本当の意味での沖縄理解につながるかというと、はなはだ疑問が残る」

一方で氏は、ここ数年の新たな流れとして沖縄に対する理解を

強い映像手法も出てきたと述べ、その一例として映画『豚の報い』(崔洋一 / 1999) を挙げています。

こうした批評を通じてジェロー氏は、映像表現による安易な地域への同一化と、それがもたらす歴史的背景の軽視について危機感を示しました。

「他者を理解することは簡単ではないが、ときに映画は、その現実を見えにくくさせてしまう。まず沖縄という地域の差異を尊重し、そのうえで意図的に突き放すような視点があっていい。他者を他者のまま受け入れることが、映画の、そして日本の多様性を支えていくのだと思います」

【パネルディスカッション】

「沖縄の映像と記憶 — 受け継がれるものとその手法 —」

ディスカッションでは、沖縄を題材とした映像表現の現状とメディアリテラシーの問題について、文化、映像、民間それぞれの立場から意見が交わされました。

まず映像をめぐる周辺環境の変化について(株)沖縄映像センター代表取締役の玉城氏は、「通信インフラが整備されればされるほどコンテンツの質、つまりクリエイティビティが問われてくる。観光目的でいえば今後、動画による情報提供は絶対に欠かせないが、なんでもアーカイブすればいいというわけではない」と述べ、いかにレアで質の高い情報を提供できるかが鍵になると展望しました。

次いで基調講演から引き続いての参加となったジェロー氏は、「質の高い映像ということでは、撮る側の視点に多様性を持たせることが大切」と述べ、それがたとえ同じ映像であっても、切り口が違えば、観る側は違う記憶をたどることができるはずだと語りました。

今回コーディネーターを務めた琉球電影烈伝・沖縄実行委員会事務局長の仲里氏は、映像メディアの強い影響力を認めつつ、「(私を含め)沖縄の人々にとっての戦時中の史観は、皮肉にも米軍の撮影した映像によるところが大きい」と述べました。

後世への継承を考えたとき、歴史的な映像アーカイブをどういった文脈で読み取り、どうストーリー化するのは大きな課題です。この点について有アトレ設計代表取締役の親泊氏は、「映像は、前提として撮る側の視点から逃れることができない。アーカイブにはある種のドキュメンタリー性が必要だが、これと撮る側の眼差しに束縛されている」との認識を示しました。一方で親泊氏は、ドキュメンタリー手法とは異なる映像表現の可能性として、次のように述べました。

「撮る側の意気込みを抑えるというのは非常に難しいもの。ただNHKで放映された『ちゅらさん』は、沖縄の日常を素直に捉えたという意味で、これまでにない名作だと思います」

歴史的な先入観からではなく、あくまでも沖縄の日常を表現した『ちゅらさん』についてジェロー氏は、「沖縄の表象としては非常に新鮮なもの。このほか北野武監督の描いたフィクショナルな沖縄も、従来の視点とは明らかに異なるという意味で感銘を覚えた。いずれにせよ、我々は沖縄をひとつの表象として語ることはできないし、実際そうではないという認識が重要」と強調し、映画撮影には、いわば複眼的な視点が必要だと述べました。

現在は映像制作に携わりつつも、元来スチル撮影を本業としていたという玉城氏は、「スチルの奥義に『瞬間を剥ぎ取れ』という教えがあるが、映像が瞬間の連続だとすればその考え方に通じるころはあると思う。いま過ぎていく瞬間を、沖縄の姿を剥ぎ取っていく作業は、やはり映像にしかできないのではないかと語り、映像アーカイブの可能性を示唆しました。

議論のまとめとして仲里氏は、「同じ戦争の映像素材を用いても、ナレーションや編集のされ方によって勝ち組にもなれば負け組にもなる。私たちが日々目にする映像はなんらかのバイアスがかかっているわけだから、撮る側はもちろん観る側にも、そうした認識がますます問われるだろう」と述べ、映像時代におけるメディアリテラシーの重要性を訴えました。



パネルディスカッションの様子。左から仲里氏、玉城氏、ジェロー氏、親泊氏。

プログラム

- 開会の挨拶
玉城 健
沖縄デジタルアーカイブ推進協議会 代表幹事
- 来賓挨拶
比嘉 為弘
沖縄県商工労働部 次長
- 講演
「日本映画における『沖縄』の表象」
アロン・ジェロー
イェール大学研究員 / 映画研究家

- パネルディスカッション
「沖縄の映像と記憶 — 受け継がれるものとその手法 —」
コーディネーター 仲里 効
「琉球電影烈伝」沖縄実行委員会 事務局長
- パネラー
アロン・ジェロー イェール大学研究員 / 映画研究家
親泊 仲真 有限会社アトレ設計 代表取締役
玉城 惇博 株式会社沖縄映像センター 代表取締役
- 協賛の挨拶
笠羽 晴夫 デジタルアーカイブ推進協議会 事務局長
- 閉会

沖縄デジタルアーカイブ『Wonder沖縄』 Web公開のご案内

地元観光産業の振興をはじめコンテンツビジネスの人材育成と強化、そして伝統文化の保存・継承・発信を目的とした沖縄発のデジタルアーカイブ『Wonder沖縄』が、2003年6月によりWeb公開されています。歴史・自然・美術工芸・芸能・民俗・その他の6分野に区分けされたメニューは、さらに首里城や琉球ガラス、食文化など25部門のコンテンツに細分化され、沖縄の風土・文化を網羅するかたちで構成されています。また同サイトには、「時空ナビ&スクール」や「情報銀河」など斬新なナビゲーションシステムも導入されています。

(運用開始から2003年12月末までの総アクセス数は3,946,512件、1日平均では19,346件)



• <http://www.wonder-okinawa.jp/>

「日本アーカイブズ学会(仮称)」の発足に向けて

2002年12月7日の呼びかけ以来、日本のアーカイブズ学の進展を目的として、「日本アーカイブズ学会(仮称)」の設立準備が進められています。

同学会は、アーカイブズに関心ある個人(学生や海外在留者を含む)により構成されるもので、その研究領域としては、現状下記のようなものが予定されています。

- (1) アーカイブズの管理に関する研究(記録史料管理論)
- (2) アーカイブズの成立・構造・伝来などに関する研究(記録史料認識論)
- (3) アーカイブズの教育・研修に関する研究(アーカイブズ教育論)

詳しいお問い合わせは、以下ホームページ中の同学会発足準備事務局まで。



• <http://www.jsas.info/>

事務局だより

今号は、2003年12月までに各地で開催された、デジタルアーカイブ関連のイベントの内容をレポートしました。世界遺産・厳島神社のある宮島で開催された「地域デジタルアーカイブ全国大会2003 in HIROSHIMA」は、全国各地からの方々が集まり盛況でした。デジタルアーカイブに関する普及啓発にとって大変有意義なイベントであったといえます。

今後もデジタルアーカイブ関連のイベントが計画されています。イベント開催につきまちは、実施が決まり次第、お知らせします。

また「デジタルアーカイブ白書2004」の予定は、下記の通りとなっております。発刊の際はJDAAホームページやメールマガジンにてお知らせいたしますので、いましばらくお待ちください。

なお、2003年9月より事務局が下記の住所に移転しましたのでお知らせいたします。

■『デジタルアーカイブ白書2004』について
現在、鋭意制作中です。出版は、2004年3月を予定しております。

●メールマガジンのご案内●

デジタルアーカイブ推進協議会(JDAA)では、普及啓発活動の一環として、メールを使用した情報提供を行っています。

内容としては、JDAAが関係するイベント情報、広報誌等の発行物の案内、JDAAホームページの更新情報、関連団体のイベント案内、等です。発行は、不定期ですが、月1回程度を目標としております。

メール配信をご希望の方は、JDAAホームページからの申し込みが可能です。購読は無料です。

<http://www.jdaa.gr.jp/mail/mail.htm>
デジタルアーカイブに関心のある方は、是非お申し込みください。

■現会員一覧 平成16年2月現在)

(株)イマージュ / (株)NHKエンタープライズ21 / (財)NHKエンジニアリングサービス / (株)NHKテクニカルサービス / (株)NTTデータ / (株)オーエムシークリエイティブ / 岡村印刷工業(株) / (学)河合塾 / (株)紺文 / 三洋電機(株) / 大日本印刷(株) / (株)ティ・エス・エス・プロダクション / (株)東北新社 / 鳥取ガス(株) / 凸版印刷(株) / ナカシャクリエイティブ(株) / (株)ナック映像センター / 日本電気(株) / 日本政策投資銀行 / 日本ビクター(株) / (株)日立製作所 / (株)PFU / 富士写真フイルム(株) / 富士通(株) / 三菱電機(株) / 早稲田システム開発(株)

26社

石川県 / 香川県 / 岐阜県 / 埼玉県 / 島根県 / 上田市 / 大垣市 / 京都市 / 高遠町

9自治体

地域文化デジタル化推進協議会 / 新潟地域文化デジタル化研究会 / (財)芸術研究振興財団 / (財)デジタルコンテンツ協会 / 青森デジタルアーカイブ推進協議会

5団体

合計: 40会員

表紙作品について

「Y市の橋」 1942年

松本竣介(1912~1948) 岩手県立美術館 蔵

幼少より岩手の地に育ち、その後日中戦争から太平洋戦争へと続く混迷の時代を生きた松本。その真摯な芸術的姿勢はときに「抵抗の画家」とも称され、困難のなかで普遍的な人間性を失うまいとした画家の象徴となった。繰り返し描かれたその橋の名残りは、いまでも横浜駅東口近くに見ることができる。

デジタルアーカイブ推進協議会のWebサイト <http://www.jdaa.gr.jp/> 最新情報や本誌のバックナンバーがご覧いただけます。

発行所: デジタルアーカイブ推進協議会(略称: JDAA) Japan Digital Archives Association

〒102-0083 千代田区麹町5-7 秀和紀尾井町TBRビル815号室(財)デジタルコンテンツ協会内 TEL: 03-3512-3906 FAX: 03-3512-3908

発行人: 事務局長 笠羽晴夫 編集: 事業部会 表紙題字: 平山郁夫 表紙写真提供: 岩手県立美術館

デザイン・印刷: (株)オーエムシークリエイティブ
(本誌記事の無断転載・訳載を禁じます)